

Alternative Systems Study Bulletin

第13巻第3号

(2005年8月15日)

ヘーゲル論理学とマルクス価値形態論

内田弘の問題提起に寄せて

ライプニッツを旅する(下) 実体論の研究(第3回)

杉村昌昭さんの『分裂共生論』

後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール kyw04500@nifty.ne.jp

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

ヘーゲル論理学とマルクス価値形態論 内田弘の問題提起に寄せて

2005年7月27日

1) はじめに

内田弘さんの『経済学批判要綱の研究』がお茶の水書房から再版されました。最近ネグリの要綱研究(『マルクスを超えるマルクス』)にコメントしたとき(『情況』2005年4月号「ネグリの『要綱』研究」)、すでに内田さんが先行して業績を示されていたこと(『情況』2004年1・2合併号「ネグリの『経済学批判要綱』論の問題像」)があり、また『季報唯物論研究』92号にも投稿されていたので気になっていました。

再版された労作は、もともと1982年に出版されたものですが、当時は依存関係史論や自由時間論に注目していました。

ところで、いま改めて内田さんの諸著書を紐解くとき、私の興味は『中期マルクスの経済学批判』(有斐閣、1985年)に向かっています。というのも、そこにはアリストテレスとヘーゲルがマルクスにとっての導きの糸であったことが示されているからです。

ヘーゲル弁証法の転倒については、私のライフワークのひとつとってよいテーマですが、内田さんの業績については全然検討しないままでした。いま私は関係の一般理論を構想中で、廣松渉流の「実体主義」批判に基づく関係主義ではなく、実体論そのものを関係論として捉えなおすことを目標に、ライブニッツの実体論やアリストテレスの実体論を検討しているところです。そのようなときに、マルクスの『要綱』とアリストテレス原因論及びヘーゲル論理学の関連を究明した内田さんの労作は、私自身のテーマを考えていく上でいい機会となりました。

内田さんの『中期マルクスの経済学批判』の第3章『経済学批判要綱』とヘーゲル『論理学』は、マルクスの『要綱』とヘーゲル『小論理学』とを対照したトータルな作品です。全体について検討する余裕はありませんので、自分自身の問題意識に関連しつつ、商品の価値形態についての内田さんの定式に代案を提出することにとどめます。

2) 私の商品論

私自身の問題意識を述べることから始めましょう。友人だった故八木俊樹が最初に出版の労をとってくれた『資本論の復権』(鹿岩社、1978年)をまとめた頃には、宇野経済学の批判を課題としていましたが、宇野がマルクスの価値形態論を高く評価していることについては、宇野流の解釈には同意できないものの、卓見だと思っていました。ところが肝心の価値形態論の意義については良くわからないままでした。

八木は二冊目の『ソヴィエト経済学批判』(四季書房、1982年)を編集するときに、廣松の価値論への批判を加えてほしいと要請があり、第四章に廣松批判と『資本論』初版価値形態論の研究を収録しました。この研究は価値形態論について現行版と初版と付録を比較対照したものでした。ここで明らかにした初版価値形態論の意義に基づいて、一応のまとめをつけたのが、八木の手になる三冊目の『価値形態・物象化・物神性』(資本論研究会、1990年)だったのです。

この最後の本の問題意識は、八木俊樹、表三郎らと一緒に組織した信用論研究会での討論によって育てられました。八木は当時量子商品論(『逆説の対位法 八木俊樹全文集』八木俊樹全文刊行委員会<075-525-3630>、2003年、584頁、)を提起し、“資本が悪いということだけでなく、商品も悪だという必要がある”と繰り返していました。私のここでの価値形態論説明は、八木のイメージとは多分異なっているとは思っていますが、商品そのものが悪だということについての私なりの見解でした。それは諸商品という物象が人格の意志を支配しているということの解明であり、商品所有者たちは無意識のうちでの本能的共同行為によって貨幣を生成しているという貨幣生成論でした。私にとっての商品の悪とは、それが人間にとっての無意識の領域を支配している、というところにあったのです。

3) ヘーゲル本質論とマルクス価値形態論

マルクスの価値形態論は、価値関係を素材としていて、そこで展開されているものは関係態の解説です。ヘーゲルは関係態については論理学の本質論の反照諸規定であつたので、価値形態論とヘーゲル論理学との関連については、本質論を参照すべきです。

ところで、私はすでに、「外の主体の弁証法」で、ヘーゲルの弁証法が意識を主体とする意識の弁証法であり、これを転倒するためには、ヘーゲルが意識の契機とみなしている自我と対象を主体とみなし、意識をこれら外の主体が反照しあう場とみなすこ

とが必要であることを示しました。それでまず、外の主体の弁証法の立場を本質論に適用してみましょう。

ヘーゲルは『大論理学』で反照諸規定について展開するに当たって、次のように述べています。

「反照は本質が自己自身において仮象する運動である。自己への無限の還帰としての本質は直接的な単一態ではなくて否定的な単一態である。」(『大論理学』寺沢訳、以文社、第二巻、44頁)

ヘーゲルが本質というとき、精神(意識)の論理的一階梯のことであり、もともとは意識一般のことです。そして、ヘーゲルの論理学にあつては、この意識が反照の主体であり運動の主体です。だから、外の主体の弁証法の立場から、これを価値形態論の論理として読み解くと次のようになります。

本質とは価値のことであり、それは社会的実体です。運動するものは関係の両極で、簡単な価値形態を想定すれば、二つの異なる商品となります。両極が関係に入ることによって成立する価値関係は両極の反照の場ですが、その際の反照は両極を素材とした超感性的な現象形態を構成します。このような読みをもって、『要綱』と論理学とを対照してみましょう。

4) 『要綱』の価値実体論

価値形態論を、簡単な価値形態から出発して一般的価値形態を経て、貨幣形態にいたる、という『資本論』現行版のイメージで捉えると『要綱』にはこのイメージは不在です。ただマルクスは現行版でも「あらゆる価値形態の秘密は、この簡単な価値形態のうちにひそんでいる」(『資本論』原典旧53頁、新63頁)と述べており、『要綱』では簡単な価値形態についてはそれとして分析しているので、そこで価値形態の秘密が解明されているかも知れません。もし、そうだとしたら、マルクスはすでに『要綱』で価値形態論の課題を解決していた、ということになるでしょう。そしてその際、ヘーゲルの論理学との関係はどうだったのかということ、内田さんの労作を参照しつつ、見てみることにしましょう。

さて、『要綱』執筆当時にマルクスが参照したのは『小論理学』でした。以降は『小論理学』を素材にして『要綱』の価値の分析と照合してみましょう。まず、ヘーゲルは区別について次のように述べています。

「区別は、(1) 直接的な区別、すなわち差別であつて、この差別においては、区別

されたものはそれぞれ向自的(独立)に、それがあるところのものであり、他者への自分の関係に対しては無関心であり、したがってこの関係は自分にとっては外的な関係なのである。差別あるものの、それらの区別に対する無関心性のゆえに、区別はそれらの外で、第三者、すなわち比較するものにおいて起こる。この外面的な区別は、関係させられるものの同一性としては相等性であり、それらの不同一性としては不等性である。」(樫山訳、『世界の大思想』II-3、河出書房、117節、130頁)

ヘーゲルはこの区別を論じる前に「本質は、それが自己を自己自身へと関係させる否定性であり、したがって自己を自己自身からつきはなすことであるときにのみ、純粋な同一性であり、また自己自身への照り返しなのである。だから本質は本質的に区別の規定を含んでいる」(116節、130頁)と述べています。ここでヘーゲルが考えている事柄は、存在している対象を、自我が意識のうちに取り込むことで成立する意識の契機としての存在が、本質の次元になると、存在している対象についての別の意識が形成されて、この意識の内にもともとあつた存在を否定する、という形で思考の運動が進むということですから、外の主体の弁証法からすれば、存在の二重性という問題だということになります。存在が、存在とその他者、というように意識の中で二重にあらわれるときに、両者がそれぞれ独立したもので、お互いに無関心な差別としてあり、そのために、ヘーゲルは区別は第三者において比較しあっていることに注意を促しています。

マルクスは、『要綱』で二つの商品の価値関係を分析して次のように述べています。

「商品 $a=1$ シリング(すなわち、 $=1/x$ 銀)、商品 $b=2$ シリング(つまり、 $2/x$ 銀)。だから商品 b は商品 a の2倍の価値。 a と b とのあいだの価値関係は、両者が価値関係とではなくて、第三の一商品の分量と、銀と交換される比率によって表されている。」

(『経済学批判要綱』第1分冊、大月書店、1958年、61—2頁、MEGA、75頁)

マルクスはここで「価値関係」という言葉を述べていますが、しかしここで展開されているのは、価値関係の分析、つまり価値形態論ではなくて、価値実体論ですね。 a 商品と b 商品の価値の区別はそれぞれが第三の商品の一定分量と交換される比率で表されている、という記述は、まさにヘーゲルの区別論の展開と一致しています。さて、ヘーゲルは、区別論の中で展開した相等性と不等性について次のように付言しています。

「悟性はこの(相等性と不等性という)規定をさえもはなはだしく相互に切り離してしまう。つまり、比較ということは相等性と不等性との両方にとって同じ一つの基

体を持っているにもかかわらず、そして、相等性と不等性とはこの同じ基体における二つの違った側面であり、見地の違いであるといわれているにもかかわらず、相等性だけが単独に取り出されて前者すなわち同一性であり、不等性だけが単独にとり出されてこれは区別である、とされるのである。」(117節、130頁)

相等性(同一性)と不等性(差異性)ということは、比較によって生じることですが、比較するということは、同じ一つの基体を持っていることだと、ヘーゲルは注意を喚起しています。マルクスは一つの基体について、労働を見出します。

「商品(生産物または生産用具)はいずれも、一定労働時間の対象化にイコールである。商品の価値、商品が他の商品と交換され、または他の商品がその商品と交換される割合は、その商品に実現されている労働時間の分量にイコールである。たとえば、商品が労働時間1時間にイコールであれば、それは労働時間1時間の生産物である他のいっさいの商品と交換される。」(『要綱』、62頁、M、75頁)

さて、ヘーゲルの反照規定は、区別から区別されたものが相互に両極となって関係しあっている対立へと進んでいきます。

「相等性とは、単に互いに同じではない、同一的ではないものの一種の同一性である。一そして不等性とは不等なものとの関係である。だから両者は決して二つの違った側面とか見地のちがいとかに、互いに無関心に離れてあるのではない。そうではなくて、一方は他方への照り返しなのである。だから差別性は反照の区別、あるいは自体的区別、規定された区別である。」(118節、131頁)

ヘーゲルは本質を関係の両極の反照と捉えましたが、しかしヘーゲルの本質は意識ですから、この両極は主体として捉えられず、反照の単なる素材とされるにとどまっています。これに対して両極に主体を見るマルクスはどのように展開しているでしょうか。

「しかし商品が、あるいはむしろ生産物ないし生産用具が、価値としての自分自身から区別されているがゆえに、価値としての商品は生産物としての自分自身から区別されている。価値としての商品の性質は、商品の自然的存在とはちがった存在をとることができるし、またとらなければならない。なぜか?商品は価値としてはただ量的にのみたがいちがっているから、どの商品も質的には自己自身の価値とはちがっていなければならない。したがって商品の価値はまた、商品と質的に区別される存在をもたなければならない。しかも現実の交換では、こうした可分離性が現実の分離にならなければならない。なぜなら諸商品の自然的な相違性が、それらの経済的な等価

性と矛盾せざるをえず、両者は、商品が二重の存在を取得し、自然的な存在とならんで純粋に経済的な存在を取得することによってのみ、並列して存続できるからである。」(『要綱』、62頁、M、76頁)

マルクスは、価値実体の解明を踏まえ、ここでは商品の二重性という見地に到達しています。ヘーゲル的な見地からすれば、商品の本質は価値という相等性ですが、それは不等性という価値の他者との照り返しとしてあることになります。このような本質を意識に見るヘーゲルの構想を、外の主体を指定することで、マルクスは商品の二重性と捉え、その商品の運動を捉えようとしているのです。このヘーゲルとの発想の違いをヘーゲルの対立論と対照することで定式化しておきましょう。ヘーゲルは、同一性と差別性について述べたあと、対立について次のように展開しています。

「(2) 自体的区別は本質的な区別であり、積極的なものと消極的なものであって、前者は、消極的なものでないという形で自己への同一関係であり、後者は、積極的なものではないという形で、向自(独立)的に、区別されたものである、というようになっている。両者がそれぞれ自分は他者ではないという形で向自(独立)的にあるのだから、両者はそれぞれ他者のなかで照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立指定であり、これによれば、区別されたもの(両者)は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独自の規定を他者への自分の関係の中のみ持つ、そして、それが他者へと反照させられているときじつはただ自己へと反照しているにすぎない。そして、その他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者自身の固有の他者なのである。」(119節、131頁)

ここで、積極的なものを価値とし、そして消極的なものを使用価値とおいてみましょう。ヘーゲルはここで商品の本質を問題にしているのですが、その本質とは反照関係であり、対立指定であって、自分(価値)の他者(使用価値)を自分に対して持つ、つまりは価値と使用価値との反照を商品の本質と見ているところにあります。

マルクスはこの商品の本質を意識の外に求めました。だからマルクスは二つの商品の価値関係の中に、両極(価値と使用価値)の反照関係を読み取り、商品の二重性を捉えたのでした。しかし、ヘーゲルの場合、商品の本質とは、本質まで高まった商品についての意識のことですから、両極は意識の中での両極でした。

5) 原価値形態論

『要綱』での原価値形態論を私は次のところに見出します。

「1 シェップェルの小麦はこれこれシェップェルの裸麦に値する。このばあいに、小麦が裸麦で表現されるかぎりでは、裸麦が交換価値である。二つのうちどちらかがただ自分自身にだけ関係するかぎりでは、それは交換価値ではない。さて貨幣が尺度として現れる関係においては、貨幣自体は関係としても、交換価値としても表現されないで、一定の物質の自然的な量として、金または銀の自然的な重量分量として表現されている。一般に他の商品の交換価値を表現している商品は、交換価値として、関係として表現されないで、その自然的性能での定量として表現されている。1 シェップェルの小麦は 3 シェップェルの裸麦にイコールに値するならば、1 シェップェルの小麦だけが価値として表現されており、1 シェップェルの裸麦はそうではない。」(『要綱』125 頁、M, 134 頁)

私はここで相対的価値形態にある商品の価値が、等価形態にある商品の使用価値で表現されるという価値形態の秘密が事実上解明されていると考えます。マルクス自身この叙述に引き続いて「一商品が他の商品で表現されるならば、この商品は関係として措定されており、他の商品は一定物質の単なる量として措定されているのである。」(『要綱』126 頁、M, 134 頁) と述べているのです。

ヘーゲル論理学との関連で、この価値形態の秘密の発見は大きい意義を持っているように思われます。ヘーゲルの本質論は同一性、区別、対立、矛盾と進み、矛盾は根拠(同一性と区別との統一)へと解消されます。矛盾についてヘーゲルは次のように述べています。

「積極的なものは前に述べた差別あるものであるが、これは、向自的であると同時に、自分の他者への自分の関係に対して無関心ではないはずのものである。消極的なものも同じく自立的であり、自己への関係であり、向自的であるはずであるが、同時に、消極的なものとして、端的に、自己へのこの自分の関係、つまり自分の積極的なものを他者においてのみ持っているはずである。したがって両者は措定された矛盾であり、両者は自体的には同じである。両者はまた向自的にも同じである。というのは両者はそれぞれ、他者と自分自身との止揚なのであるから。かくして両者は根拠へと(没落して)行く。」(120 節、133 頁)

ヘーゲルは、積極的なものと消極的なものの対立を矛盾として捉えますが、しかし、すでに見たように、積極的なものも、消極的なものも、意識という同じものであり、精神についての規定ですから、両者は意識の内で止揚され、根拠へと向かうものとさ

れています。

しかし、外の主体の弁証法からすれば、積極的なもの、つまり価値と、消極的なもの、つまり使用価値とは、二つの商品の関係において、両極の対立関係としてあって、意識のうちには解消し得ないものとしてあることになります。マルクスは二つの商品の価値関係に一方の商品の価値が他方の商品の自然質料(使用価値)で表されていることを見抜くことで、ヘーゲルの意識のうちでの矛盾を、外の主体の矛盾へと転倒させた上で、関係によって引き起こされる形態規定を明らかにしたのでした。もちろん『要綱』ではまだ貨幣の生成について解明されているわけではありませんが、貨幣の諸機能の分析はすでになされていて、これはヘーゲルのように矛盾を根拠に解消させることなく、現実的矛盾がそこで運動していく運動形態を解明していくという意義を持っていたのです。

6) まとめ

内田さんは、ヘーゲルの『小論理学』の有論の向自有(96 節)に注目し、そこでの論理展開に示唆を得てマルクスは価値形態の問題を読み破ったとして、次のように述べています。

「独立した自由で平等な人格は市場で競争しあいながら、社会的分業=交換で依存せざるをえない。この競争と相互依存はなにによって、いかに媒介統一されるのか。この矛盾について、ヘーゲルは鋭く、独立した人格(向自有)は、われをわれわれに統一する媒態、われをわれわれとして表現する『単純な形態』を生みださなければならぬ、という。マルクスはここに価値形態論の問題、貨幣の発生史の問題を読み破ったのである。……ヘーゲルが近代的な独立した個人(われ)を社会的に(われわれに)統一するとみた『単純な形態』にマルクスは価値形態、貨幣の発生史の問題を読む。」(『中期マルクスの経済学批判』、178 頁)

内田さんがここで問題にしている「価値形態の問題」とは、「ブルジョア的に共同主観的な価値の意識の発生史の問題」(178 頁)ですが、価値形態論の問題を、価値形態の秘密の解明と捉えれば、ヘーゲル論理学との関連も、別の形で考えていくことが可能となるのではないのでしょうか。

ライプニッツを旅する（下）実体論の研究（第3回）

5) 関係の形而上学

いよいよ関係の一般理論の素材となるような、ライプニッツの関係の形而上学の検討に入ります。ここでは酒井とともに、もう一人の案内人、ミッシェル・セールにも登場してもらいましょう。酒井は質の連鎖についてライプニッツが述べている事柄について、次のようにコメントしています。

『こうして自然の存在者の全秩序は必然的にただひとつの連鎖を形成する。この連鎖においては、様々の異なった諸種が、ちょうど同じ数の〔鎖の〕輪のように、互いにつながりあっている。そのため、感覚や想像力にとっては、どこで或る一つの種が始まり、または終わるのかというその点を正確に示すことが、不可能なほどである』……ライプニッツは、量的な意味の連続は、これを現象と見て実体モナドの世界から追放したが、他方、異なった形相をもつ諸モナドの無限の連鎖という、この質的な意味での連続を積極的に肯定し、モナド世界の構造を示す根本原理として強調するのである、と。換言するなら、ライプニッツにおいて『連続』の概念は、拡がり
の連続と不連続、可分的不定多と不可分的定数多というレベルの問題にだけ限定される概念ではない。むしろ、『連続』は、(そのような量的な連続からの或る類比を介しつつ) 実体モナド間の連関を根拠づける一層広い実在的概念に移しかえられる。そしてこれにより『連続』はたんに数学的幾何学的のみならず、形而上学的な存在論的な概念としての新しい積極的な内容を含むことになるのである。(124頁)

形態規定により、極が多様な質の化身とされる、あるいはモナド同士がお互いに映しあうことで、お互いを関係で表現されている質の化身とさせあっている、というように考えると、この質の連鎖や連続の観念も理解しやすくなります。

「世界の秩序とは、自発的モナドの表出によって形成される多様な関係の全体である。モナドは他のモナドを自らのうちに映し出すが、同時にまた他のモナドのうちに映されている。かかる映し・映される志向的な関係こそが、どのモナドもその中に織り入れられている世界の秩序として承認されねばならぬものである。これに比し、物体＝現象の秩序は能動・受動という因果関係だが、これは実体＝モナドには適用できない。このことは既に何度も強調したとおりである。『表出』活動を遂行するモナドには内も外もない。モナドはむしろ表出の映し・映される関係の中に、アプリアリに、脱空間的に、それゆえまた脱自的な仕方で出てきている。」(133頁)

自然学が対象とする世界は、物体＝現象の力学的・化学的因果関係の秩序ですが、これを形而上学的に捉えると、窓のないモナドが無数の関係のなかにお互いに表出しあうという世界が現れてきます。

『関係』がたんに主観によって構成されたものとしてではなく、実体モナドと少なくとも同等の実在性を主張しうるものとして考えられている点である。(135頁)

形而上学によって捉えられたモナドの関係は、単に主観的なものではなくて、実在的なものと考えていくと、つい、人類の認知の歴史において、社会関係についての認知が、極(個人)についての認知より先行していたのではないかと、という仮説にたどりつきます。原始人の神とは、人々の社会関係についての認知の産物であり、当時の人々は、極としての個々人が、類の化身とされている、ということについてよくわかっていたのではないのでしょうか。もしそうだとすれば、実体モナドの極性が、個性(身体)の認識に先行していたのであり、それは個性よりも実在的なものとして認知されていたのではないのでしょうか。そしてここから逆に、個性は類体として認知されていたように思われます。

『関係』の実在性は、『項』たる物のその中へ解消されるようなものではない。『関係』は主観に相対的な像ではなく、実在的なものである。……かかる関係の実在性にも関連して、ライプニッツはさらに、関係が、項の変化に伴って変化したり消滅するような可変的なものでなく——それは日常の見かけにすぎぬ——、常に不変であることを明確に主張する。(136—137頁)

酒井はここで項を身体を持つ個人という意味で捉えていますが、これは同時に関係の極としてあり、そして、この極は類の化身として形態規定されているとすれば、項の変化に伴って変化したりはしない、不変なものだったということになります。

「ライプニッツにおける『関係』概念の固有な性格を明らかにしようとする我々にとって見過ごせぬもう一つの点は、『関係』が多くの異なったレベルの諸関係を含む多重的なものとして考えられていることである。ロックのような立場では、『関係とは、ただ二つの物の間にのみ存する』と説くが、ライプニッツはそうは考えず、多くの事物の間にさまざまな仕方で張り渡され、もって事物が一つの全体にまとめられ統一されうるようなものとして『関係』を捉えている。」(138—139頁)

ひとつの極が多くの関係を担っている、という多重関係論は、文化の解明にとっての不可欠の方法で、文化知の基本的前提です。

6) 予定調和

多が一に集中される、という点についてはすでに見てきた。ところでミシェル・セールは『ライブニッツのシステム』(朝日出版社、1985)で、酒井とは別の視角から問題を取り上げています。セールの文章は引用しにくいので、この本に収められている論文「数学的な方法で証明された実体間の交通」の要約から始めましょう。

セールは、ライブニッツの予定調和が、ふたつのモノドが他のモノドと関係を結ぶ際にそれぞれが神との関係というふたつの関係を想定していると見ている。二つのモノドの関係以外にそれぞれが神と関係している、というこの迂回路について、モノドが二つの場合は余分なものようです。しかしセールはモノドの数が増えると、迂回路のあるほうが、諸関係の数における経済性が数学的に証明されています。

「実体の複数性が与えられるやいなや、この多数性において完全な関係を成り立たせるには、予定〔調和〕説が数的に最も経済的な解決法だということが、結合法によって証明されるのである。」(196頁)

予定調和については、とっつきにくい考え方ですが、ライブニッツにあつては、迂回によってモノドに映し出される神とはモノドを生成させる力であるわけですから、自然学とは逆の発想が必要だとセールは見えています。

「空間的な観点から見た外観は神による操作という、それ自身延長を持たない操作に基礎を置いている。従って、予定調和を場所およびその場所に固有な線と図式によって説明しなければならないというのは全く逆で、実際には現象的な関係としての場所の方が、諸モノドが予定調和において神と取り結ぶ本質顕在的な関係によって、還元され、説明され、確固とした基盤を与えられているのである。ところで、この関係は、諸モノドが神の内にあるそのあり方が分割することも計測することも不可能な精神的な場所の中にあるごとくなのだから、直接的=無媒介的であり、共-現前的である。現象的な空間性の背後では、すなわち複数の引かれた線からなる想像上の図表の背後では、大きさも分割も位置も距離も欠如したところで、つまり、場所というものが無いところで、実在的な本質顕在化の作用が働いているのである。」(202頁)

セールの考えに触発されて、予定調和を形態規定の働きと捉えると、私にとってライブニッツが非常に身近な存在になってきました。

セールは、自然学で捉えられる現象を常識とは逆に、想像の領域にとらえ、形而上学で捉えられる予定調和を実在とみなしています。そのことの証明として、ここでは、この実在から現象がどのように導かれるかについて証明しているのです。これはまた、

別の形では次のようにも説明されています。

「なぜライブニッツが無差別に神は調和の原因であるといったり、調和は神の発現である、もしくは調和とは神そのものにほかならないとか述べているのかを厳密に説明するものである。両者いずれの場合にも、問題となっているのは長さがゼロの複数の辺一周関係を持った、いたるところに現前する頂点-中心である。同じ思考構造が前者(神)にも後者(調和)にも有効なのだ。こうしてわれわれは、想像の領域から実在の領域へ、空間からその条件へ、幾何学から形而上学へと移行したのである。従って、実在の世界においては、直感することの困難な普遍的交通の図式は、もともと、時間というものがなく、位置もなく大きさがゼロで距離もゼロ、そして分割も不可能という条件でおこなわれる神的な操作=本質顕現化の作用によってのみ構成されている。」(205-206頁)

セールはモノドがもつ多様な質を、長さがゼロの辺を持つ多角形のイメージで捉えていますが、そうではなく、ライブニッツの「調和」を形態規定と捉えるともっと解りやすいと思われます。ゼロの辺ではなくそれはモノドの多重性として捉えられるからです。ところでセールは次のように述べています。

「予定調和は想像の領域における最短距離の解決法であるばかりでなく、また実在性の領域においてそれが最も単純な構成であるというばかりでなく、諸交通路の単純性とは無の交通路のことであるという数学的理由によって、予定調和は根本的な起源と同形であり、神による創造そのものなのである。無からの数学的モデルは、いかなる要素にも基づかない構成である。」(208頁)

セールはここで、「神による創造」と述べていますが、これを逆転させればどうでしょうか。つまり、人間の社会を神を創造する関係として捉える試みです。もともと原始人が人間を個としてではなく類という関係として捉えてこれを神と見たとすれば、人が神を創造したのです。つまり、人と人との社会関係における形態規定が神を創造したのですが、しかし、人々には、神が世界を創造した、というように逆転してみえるのではないのでしょうか。

7) 形態規定論へ

さて、再び酒井の案内に戻りましょう。

「ライブニッツは、自らの『一』において『多』を表出するモノドだけを实体として承認する。モノド——それは他のすべてのモノドを表出し、このことによって他の

全てのモノダに關係する——が形成する無限に多様な關係の全体、これが世界である。実体モノダの關係は現象＝物体の場合と異なり、多様である。そして、世界における關係を多様なものとして強調する見方は、『実体』を、延長にではなく、精神的なものの方にこそ認めようとするライプニッツの基本態度に、じつは根差している。」(143頁)

先ほどの仮説を続けましょう。原始人が個としての極よりも、極が形態規定されて類の化身とされている、という事態をまず認知し、それを神と名づけたとしたら、そして、形態規定が、人の社會關係が創造した神を、逆に神が世界を創造したかのごとき觀念を人々に与えるとすれば、哲学史を新たな観点から読み解くことが可能となります。

古代ギリシャの哲学は、神が創造したとされている世界の諸現象についての認識が自然学として深められるとともに、創造の領域は、神話に代わって形而上学によって解明されるようになりました。中世に入ると神学という形で形而上学の神学への隷屬が起きてきますが、近世にあつては、關係の極としてある人間が主体として発見されました。以降は、極の極性は忘却され、もっぱら極を担う自然的質についての研究と、それがもつ対象についての意識のあり方が主要テーマとされたのでした。

關係の極がもつ極性については、マルクスが『資本論』の価値形態論で解明しましたが、それは誰にも理解されなかったようでした。でも、マルクスの価値形態論を關係の極についての解明と捉えると、關係の形而上学を打ち立てる必要性が出てきます。

「ライプニッツは次のように言う。『これらの表出〔關係〕に共通なことは、表出する側の諸条件をよく考察しさえすれば、それに対応する表出さるべき事物の諸特質の認識に我々は至ることができるということである。したがって、表出するものが表出されたものに似ている必要は明らかになく、〔ただ〕何らかのアナロギアが保たれていれば、それで〔表出關係の成立には〕十分なのである』ここに示されているく表出するものと表出されるものとは似ている必要はなく、何らかの仕方での対応があればよい」というライプニッツのテーゼは、けだし非常に重要である。表出の關係において、一方の事物は他の事物と『似ている』つまり類や種を同じくする『類似』という意味で似ているのではない。表出とは、一方と他方の間に『対応』が成立することである。そしてこの場合ライプニッツが『アナロギア』という言葉で意図しているものも、類似ではなく、対応なのである。表出によって成立する關係が類似ではなく、対応であり、対比として考えられねばならないというこの主張は、ライプニッツの思想全体を

通して中心的な意味と役割を持ち、以後の諸著作においても繰り返し表明されている。」(145—146頁)

關係における表出は、ライプニッツなら、モノダは宇宙の鏡であり神の鏡でもあるということですが、形態規定の考えからすれば、モノダ同士がお互いに相手を類の化身とさせあうことです。そして、ライプニッツがアナロギアといい対応と考えたのは、關係を成立させている社会的実体としてある同一性のことになります。とすれば形態規定の考え方からすれば、単純モノダは社会的実体の極であり、実体そのものは超感性的で關係のうちで極を類の化身として、ライプニッツ流に言えば、神を表出させる予定調和の働きとして考えていく、ということではないでしょうか。つまりはライプニッツの神とは、モノダを極として成立している社会的実体のことであり、類的存在としての人間社會を形成する力と読むことができるのではないのでしょうか。

杉村昌昭さんの『分裂共生論』

はじめに

7月31日に行われたネットワーク・情況関西の公開講座は杉村昌昭さんをお招きして、新著『分裂共生論』(人文書院)についてのお話を「ガタリとわたし」というテーマでいただきました。ただし杉村さんとしては、事前に本を読んだ上での意見交換を期待してはしていましたが、そのように進められませんでしたので、お詫びに意味もこめて、この本の感想を記しておくことにします。

分裂の意味

分裂、共生と並べたときに、共生は今日ではプラスイメージで捉えられ、内容も確定していますが、分裂のほうはそうではありません。たとえば「精神分裂症」という病名が「統合失調症」に代えられたように、分裂はマイナスイメージで捉えられています。でも杉村さんによれば、「統合失調症」という名前に代えるくらいなら、むしろ「分裂失調症」としたほうがいと述べています(19頁)。つまり杉村さんは現代社會にあつてはプラスイメージとなっている「統合」よりも「分裂」のほうに価値がある

と考えているのです。

「統合」は現実的にはこの間の新自由主義的グローバリゼーションの合言葉となっていて、何でもかんでも国際基準で統合しようとしていて、この動きについて杉村さんは「統合強制」と読み解きます。この動きに対して世界でさまざまな対抗運動が起きていますが、杉村さんはこの動きを「オルター・グローバリゼーション」と捉え、この運動にとって不可欠な視点として、「分裂共生」を提起したのです。

そのさい分裂という言葉は、人間理解に関わっていて、ガタリの「主観性(主体性)」についての理解を膨らましたものとされています。杉村さんはガタリが提起する「新たな個人的かつ集合的な主観性」について次のように述べています。

「個人という一個の人格同士が結合するのは単なる個人の寄せ集めとしての集団です。そうではなく、個人という存在そのものが無数のエレメントからなる複合体だとして、それぞれのエレメントがそれぞれの仕方結び付く。そしてその結合がどんどん増殖していくことによって、個人という人格とはまったく別の次元を切り開く。そういう仕方できつくり出される主観性というものがあり、それをガタリは個人的かつ集合的な主観性というふうに概念化したのです。そして、そうした主観性によって形成される網状的なシステムがほかならぬリズムだったのです。」(23-24頁)

このガタリの考えは個人と個人との間に形成される関係についての規定ですが、これを杉村さんは逆にこの関係の方から個人を見て、個人を分裂した存在と考えたのです。それは次のような、ネグリの多数性(マルチチュード)についての理解に示されています。

「(ネグリの多数性とは)一人ひとりの人間がさまざま異なった要素、物語を内在させており、その異なった要素に力点をおいて、ひとりが既に複数で構成されているということを念頭においた概念であるとみなすべきでしょう。」(113頁)

このように杉村さんは、個人を何らかのアイデンティティでくくられた統合された存在と見る一般的な見方に対して、個人を分裂した要素によって形成された多数性をもった存在だと見たのです。

運動の組織論

分裂した、多数性を持った存在として個人を捉えるこの見方は、新しい社会運動の組織論を構想するときに非常に大事な視点となると思います。そもそも組織なしには継続した運動は出来ませんが、組織を作ることによって不可避的に生じてくる同一化の要求

をどう解毒するか、この問題について私も考え続けてきました。私の場合は個人の唯一性を認め合える組織形態の追求という形をとって、協同主体論を構想してきました。

杉村さんの言葉を使えば組織が自然発生的に「統合強制」して来るときに、「分裂共生」という思考を組織の根底にすえてこれと闘う、ということになるのでしょうか。この本で対談者の小倉利丸さんが次のように述べていますが、これも組織の問題とかかわっています。

「モダンの主体というのは個人イコール主体であって、『私』というのは確固たる分割不可能な単数であるという、何を根拠としているのかわからないような信念によって支えられている。僕は、それ自身を解体する必要があるんじゃないかと思うんです。つまり、個人それ自体のなかに自己同一性を求めることそのものがすでに抑圧的になってきている。もはや、個人に自己同一性を求めるのがモダニズムの革命だとすれば、この自己同一性からの解放こそを今問題にしなければならないところにまで来ていると思うんですね。つまり個人のなかに多数性を解放していくことが必要なのではないかということなんです。」(121頁)

この対談は1999年に発表されています。私もこのころから、個人の唯一性を侵害しないような組織のあり方を模索し、事業を行う協同組合にその可能性を求めてきました。政治的意思統一を図る政党や、教義で意識統一を図る宗教団体では当然にも「統合強制」の力が働き、個人の唯一性は排除の対象となります。しかし事業を行う協同組合は加入脱退が自由で、かつ事業に対する責任を果たしておれば、個人の唯一性は保障できます。現存する協同組合がそのように運営されているわけではありませんが、新しい社会運動を担う組織としての新しい協同組合運動は、個人の唯一性を保障した上での協同主体の形成を可能にするものでなければならないと考えています。

協同主体論

新しい社会運動は色々な運動体によって担われていますが、事業を展開している協同組合は活動の継続性を保証していけます。特に働き手の協同組合、ワーカーズ・コレクティブなどは、そこで働き手の生活を保障していけるわけですから、働き手の社会運動参加を可能とするし、また働く場を作り出すこと自体が社会運動としての意義を持っています。この協同組合の中に協同主体を作っていくことが今課題となっています。杉村さんはこの本のまとめの部分でつぎのようにのべています。

「個人、社会、世界といったそれぞれ異質の内部を構成するさまざまな異質の次元

をひとまとめに“統合”していこうとするのではなく、このような諸次元のそれぞれが有する『特異性』を消去しないで相互に結び合わせていく、いわば関節のような役割を果たす“関係の実体”の発見あるいは創造に、これからの世界に生きる個人と社会の運命はかかっているのではないかと思われる。」(216頁)

協同主体とそれがつくり出す地域がここで語られている「関係の実体」のひとつの例となるのではないのでしょうか。このほかにNGOやNPOなどを含め、それらをグローバルに形成しようとする運動がオルター・グローバリゼーションとなるのではないのでしょうか。このように見ると、「関係の実体」は既にあり、問題はそれを大きくしていけるかどうかであって、そうしようとするときに、主観性をどう位置づけるかは、人間とは何かという問題の位置づけでもありますから、思想的な要をなしているでしょう。

「向かうべき未来社会は、原理的にいうなら、“一”と“多”が交互に循環するのではなく、“一”が同時に“多”でもありうる世界であるが、ただしそのとき“一”が“多”を支配する、いわば単数が複数を支配すると、必然的に“統合共生”から“統合強制”に向かうことになるだろう。そうではなくて、“多”が“一”をコントロールするような動的編成、つまり複数が単数を支配し、しかもその“多”が質的な相違を含むような横断的複合体、これが私のいう“分裂共生”の理念型である。ここで私が“統合”よりも“分裂”に加担するのは、“統合”が自由の臨界を支配する力を内在させているからであり、“分裂”による自由の強度と創造性の保障こそが未来への展望を切り開くだろうと考えるからである。」(235-6頁)

オルター・グローバリゼーションの運動体は色々ありますが、ここではそれらの組織の内部問題における誤った傾向についての具体的イメージを念頭におきながら、それらをうまく解消できる思想的な内容を模索しているように思われます。組織を作れば必ず直面するこれらの問題を解決していく方法について、私は公開性と責任の分散化から出発しています。そして、まだ完全に出来上がってはいませんが、デカルト的自我論に代わる関係的自我論を人間論として定式化し組織論の土台におこうと試みてきています。このような試みに同時多発的な動きがあるという事を実感することが出来た、ということがこの本の感想です。

後記

暑い日が続いています。そんなときにまた哲学的な文章を書いてしまいました。ライブニッツを仕上げたあと、しばらくエリアーデの宗教学を読んでいましたが、物を書けるまでにはいならず、関係の一般理論を書くためにはヘーゲルの本質論をやらなければと関連する本を手元に集めているときに、状況の編集長から内田弘さんの本の新版が御茶ノ水書房から出るので書評してみないかと連絡があり、何気なく内田さんの『中期マルクスの経済学批判』を手にとると、それはヘーゲル論理学とマルクスの要綱とを対比した力作でした。

肝心の新版のほうはパスさせてもらって、この本を手がかりにヘーゲル本質論を研究してみました。「ヘーゲル論理学とマルクス価値形態論」はそのような経過で書かれたものです。これを書いたことで、本質論の構造がわかってきて、関係の一般理論が何とか構想できそうになっています。

ライブニッツ論はこれで終わりになるでしょうが、これを書いた直後は神話論を書こうと書いていろいろ資料を集め始めましたが、エリアーデの聖性論が面白くこれは形態規定そのもののことを述べているように思いましたがまだ煮つまっていません。

最後の杉村さんの新著『分裂共生論』(人文書院)についてはネットワーク状況関西の公開講座で話してもらいましたが、大変面白かったので感想を書いてみました。『アンチオイディプス』は以前読んでみようと思ったのですが、読みとうせませんでした。ガタリやドウルーズの単著は難なく読めるのですが、二人で書いたものはちょっと読めません。しかし、もう一度読んでみようと思わせられた杉村さんのお話でした。

今回は「現場から」はありません。代わりに資料として、NPO 法人日本スローワーク協会が経営する、カフェ・コモンズについての広報をつけておきます。

* 『モモと考える時間とお金の秘密』購入方法

下記の郵便振替を利用してください。

郵便振替 口座名 社会システム研究所
口座番号 01040-7-33939

代金 2600 円と通信欄に、『モモと考える時間とお金の秘密』購入とお書きください。

(資料)

カフェcommonsについてのご案内です。といっても分量が多いので「寄付のお願い」だけを紹介しておきます。詳しくはcommonsの専用HPをご覧ください。

C a f e COMMONS (commons) 開店資金への寄付のお願い

NPO 法人日本スローワーク協会は、「C a f e commons」を開店します。

「C a f e commons」開店の目的は、

- 1) 引きこもり・NEETの若者たちの就労支援の現場作り、
- 2) NPO・NGO や協同組合のネットワーク形成の拠点作り
- 3) 参加型運営の実現による市民ネットワーク形成の拠点作り
- 4) 地域通貨の循環型経済圏形成のための拠点作り

です。

開店の資金についてですが、自己資金700万円と「ヒューファイナンスおおさか(財団法人地域支援人権金融公社)」からのNPO融資300万円を用意していますが、まだ若干の資金が不足しています。

そこで皆様に、「Cafe commons」開店のための資金提供を、お願いしようということになりました。

わたしたち日本スローワーク協会は「新しい働き場所」実現のために、「Cafe commons」をぜひとも成功させたいと考えています。

日本スローワーク協会と「Cafe commons」の掲げている理念に賛同してくださる多くの皆様に資金の提供をお願い申し上げます。

■寄付金 一口 50,000円

(4口以上の寄付は、長期借入金として扱わせていただきます。)

■ 振込先 りそな銀行 高槻富田支店 普通 1298409

特定非営利活動法人 日本スローワーク協会 カフェ事業部

トクヒ) ニホンスローワークキョウカイ カフェジギョウブ

〒569-0814 大阪府高槻市富田町1丁目13-25 プラザ富田 205号

特定非営利活動(NPO)法人 日本スローワーク協会

URL: <http://slowwork.org/>

mail: info@slowwork.org

C a f e commons: [URL:http://cafe-commons.com/](http://cafe-commons.com/)